

# 塚原康子先生(音楽学部・音楽学)が 学生にすすめたい本

「音程」という言葉がいつ生まれたのかご存知だろうか。私たちがふだん余りにも何気なく使っているこの言葉は、英語のintervalに対する訳語として、明治13年(1880)成稿の『西洋音楽小解』に初めて登場し明治の新しい造語なのである。ちなみにこの40年ほど前、オランダ語の百科事典からintervalの項目を訳した蘭学者・宇田川榕庵(1798-1846)は、これに「律」という伝統的な音楽用語をあてていた。

この「音程」なる訳語を考案したのは、瀧村小太郎(鶴雄、1839-1912)という人物である。瀧村は奥右筆をつとめた旧幕臣で、維新後は徳川家達の家扶(執事)として生涯を送った。瀧村が音楽に堪能で英語も達者であったことは、明治前期に来日し勝海舟の息子と結婚したクララ・ホイットニーの日記にも窺える。瀧村は月琴、胡琴など当時流行の清楽の楽器を奏で、音楽を通じてクララや式部寮伶人(のちの宮内省楽師)とも交流があった。

明治12年(1879)に設置された音楽取調掛は、瀧村が訳した『西洋音楽小解』と『約氏音楽問答』の原稿を明治14年(1881)に買い取り、西洋音楽の用語を定める参考にした。瀧村はほかに『西洋音楽調和要法』『愛米児孫唱歌声法』といった和声や発声法に関する書も訳している。『西洋音楽小解』から現在まで生き残った用語には、「音程」のほか「平均律」「旋法」などがあり、『約氏音楽問答』からは「全音階」「半音階」「長調」「短調」などが出た。むろん歴史の彼方に消えていった訳語の方が多いのだが、自ら考案した訳語のいくつかが使われ続けていることを、後年は音楽界から遠ざかった瀧村は知っていたのだろうか。

瀧村小太郎の筆になる『西洋音楽小解』『約氏音楽問答』等の稿本は、本学附属図書館に貴重書として今も収蔵され、21世紀の熱心な探求者の来訪を待っているのである。

(参考:藤原義久・長谷川明子・森節子「瀧村小太郎の生涯と楽語創成」  
音楽図書館協議会編『音楽情報と図書館』大空社、1995年)